

わすれじな忍ぶの岡の木の間よりほのみし月の秋の光を
 さそはれて心の外のかへるさをしらすで雲井の月や恨みむ
 月にまた心をうつす池水をたれ忍ばずの名をやたつらん
 一、世の有にくきを思ひつゞけて
 十二月朔、世の中の有にくき業など思ひつゞくるの餘り、
 例の蜂腰信口畢りぬ。

我人の身の憂き度に思ひいるやまの下庵いつかむすばむ
 一、愛本橋の架換

越中愛本の橋は當公の所命也。笹井七兵衛以勘辨造之。
 是黒部川四十八箇瀬の水上にして嶮岨の所也。往還の人馬
 得自由、且一佳景の境地也。當秋破損に付修覆し、功成を
 以て奉行等欲退散之處、爲出火燒燼し、重て造之。

一、風爐釜・蒔繪臺子等献上

是年十一月廿八日、金銀の風爐釜并蒔繪臺子各一節及御社
 三座献上せらる。土圭師平兵衛鑄之、清水源四郎蒔繪す。
 各盡美也。

一、時事を感じて

ながらふるおもひでは、あはれ閑にして風景にのみ心を寫

し、花鳥を友として、あらまほしき事なりと思ふにつけて、
 前の一首は思ひつゞけぬ。我人の一首也。さて又身のうへのあやふ
 さ、世につかふる身は、中々に安き心地ぞあらざるものか。
 けふまでの心習ひにあすしらぬ身の危さも忘れてやすむ
 けふ事なきとてたのむまじきに、いつもかくてあるべきと
 思ふこそ、あさましけれと思へばなり。

一、家僕、花を折て慰めければ

臘月十八日家僕鈴木氏、白梅・水仙花の快きを折添て慰め
 ければ。

いとやく花さき初て新玉の年のこなたににほふ梅が枝
 手折來て袖にぞかをる梅の花冬にしられぬ宿とこそみれ
 十九日雪初て降。折ふし金子家重の許より消息あり。雪の
 こと書て遣ける序に、故郷の事など書て。

一、廿五日對梅花

冬かけて霞む軒端の梅の花うつろはむ間に春やかさねむ
 一、年内立春

常磐山かすみにしるし松の葉の變らぬ年に春や來ぬらん

朝ぼらけたてる霞の關の戸を越やらぬ年に春はきにけり

武藏鏡□をかけて立はるのさすがにしろゝかすむ空かな

一、歲暮の歌

廿八日

吳竹の一夜ふた夜と待春に先だつ今朝のうぐひすのこゑ
 春といへど冬の日數の朝戸出にそれかあらぬか鶯のこゑ

歲暮

待えては年の緒ながく思ひしに暮るもはやくかはる心よ
 ながしてふ思ひし年も吳竹の一夜二夜を過ぎしばかりに
 暮てゆく年の名殘の惜きかなまた立歸るけふにあらねば

歲暮述懷

年暮しけふにあはせて思ふ身の行方もかゝる露の玉の緒

一、庚申歲旦試筆

立春

年の内に春は來ぬれと霞む日の光もけふぞ新たまりぬる

野外立春

武藏野は空もひとつに霞みけり暮にし年の立かへりけん
 さし昇る日影長閑に武藏野の草木もけふや春をしるらん

關路立春

立かへる春は東の關の名も空にしられて今朝かすむなり

對梅風といへる心を

おしなべて花の春風渡れとも梅さく宿はことさらにこそ

早春

よしの山霞の衣たちかへて今朝はみ雪のもとにほへる

山霞

芳野山はなの下紐むすぶらんかすみの衣うちかはへて見ゆ

野霞

若草のはるの霞の深ければ日影こもれるむさしののほら

霞隔山家

春といへど猶さむしさは眞柴屋のみえし外山も霞隔てゝ

野外眺望

むさし野や霜はきえゆく若草のはるかに残る富士の白雪

若菜

峰の雪かすめば花の春風にふもとの若菜つみがてにする

春水

雪とちし谷の戸ぼその明ぼのにおとづれそむる春の山水